

【資料紹介】

篠原歌舞伎の地芝居衣裳について  
しのぼら

—付・当館所蔵衣裳一覧表—

三浦麻緒

【キーワード】

地芝居 篠原歌舞伎 農村歌舞伎衣裳

【要旨】

江戸時代の文化文政期から昭和初期まで、全国各地では地芝居が盛んに行われていた。神奈川県内でも多くの場所で上演されていたことが、各報告書や現存する舞台数で知ることができる。当館では、昭和四〇年（一九六五）に篠原歌舞伎保存会より寄贈された地芝居衣裳を所蔵しており、近年改めて資料整理を行った。本稿は資料の背景となる篠原歌舞伎についての概要を述べた上で、衣裳の詳細について紹介するものとする。

はじめに

地芝居は、全国的に一九世紀はじめの文化文政期（一八〇四—一八三〇）ごろから明治時代末期までが最も盛んだったといわれている。娯楽の変化とともに少しずつ衰退するものの、昭和初期まで行われた地域も多い。

角田一郎の戦後農村舞台の調査においては全国に約二〇〇〇棟の舞台が報告されている。なかでも、関西地方（兵庫県・約四〇〇棟）や中部地方（岐阜県・約三〇〇棟）は舞台数も多くその盛況ぶりを窺うことができる。関東地方では、群馬県の一一七棟に次ぎ、神奈川県では九〇棟以上の舞台が現存しているという報告がある<sup>1)</sup>。

現代のようにテレビやインターネットもなく、交通手段も限られていた時代、地域で行われる地芝居は農村の人々にとって数少ない楽しみの一つであった。しかし、娯楽的要素が強くなり華美なものであった地芝居はしばしば取り締まりの対象となったため、神社の祭礼や雨乞いなどと結び付けられ、表向きは奉納や祈願として行われる例が多かった。農村舞台と呼ばれる建物が、神社の神楽殿や拝殿を兼ねていることが多いのはこうした理由もある。

当館では昭和四〇年（一九六五）に、旧津久井郡藤野町牧野篠原（現相模原市緑区牧野）の篠原歌舞伎保存会より衣裳類一式の寄贈を受け、一二二点の資料を収蔵している。これまで当館の常設展示や特別展、また平成二二年（二〇一〇）の相模原市立博物館の特別展「津久井の自然と文化」四月二九日—五月八日・通年展示）において資料の一部については紹介してきたが、その内容は報告されてこなかった。これは、芝居衣裳が消耗品であり処分される運命をたどったものも多く、また研究

においても台本や舞台分布の調査が先行し、衣裳の研究が一九八〇年代までされてこなかったことにも一因があるだろう。永田衡吉も、篠原歌舞伎の衣裳について著書の中で紹介しながらも、「篠原カブキの遺産として注目されるのは舞台とカブキ台本である」と述べているように、衣裳への関心度は低い<sup>(2)</sup>。

そこで本稿では、近年改めて行った資料整理の報告として、衣裳の背景となる篠原歌舞伎の概要を説明し、所蔵の地芝居衣裳について紹介する。また本文末尾には衣裳の一覧表(表3)を付した。今後の県内の地芝居研究の基礎データとしたい。

## 一 神奈川県内の地芝居

前節で述べたように神奈川県内には約九〇棟以上の農村舞台があったと報告があるが、中には常設舞台を持たない地域においても民家の軒先や広場などの仮設舞台上演されていたこともあった。

守屋毅は全国の舞台の分布について、地理的に平野部ではなく山間・海浜といった辺鄙な地帯に集中していること、その中でも養蚕・製糸を主要な商品生産物とする関東・中部・山陰などの中間地帯に多いことを指摘している<sup>(3)</sup>。神奈川県内の舞台は、玉木裕希が分布図で示しているように厚木市・秦野市・茅ヶ崎市・相模原市の順で相模川流域に多く分布している<sup>(4)</sup>。いずれも養蚕を生業とする地域であり守屋毅の指摘に当てはまる。

地芝居を演じていたのは、地方興行に訪れた本職の歌舞伎役者から演技指導を受けた地域の若者たちで、時としてその地域に定住した歌舞伎役者と共に歌舞伎一座をつくることもあった。永田は、これを農村歌舞伎のセミプロ化とよび、大正〜昭和初期には本県内で一〇以上の歌舞伎

一座があったとしている。地域の芸達者なものは「市川」や「尾上」姓を名乗り近隣地域で興行することもあった<sup>(5)</sup>。

ところが昭和に入ると、映画・ラジオなどの娯楽の変化、戦争などの社会情勢の変化による中断、そして戦後の高度経済成長やテレビの普及に伴う生活の変化により、地芝居は本県のみならず全国的に衰退の道をたどった。その後平成に入り地域おこしの一環などで、一部の地域で復活した地芝居もある。平成三二年(二〇一九)現在、県内にはいずみ歌舞伎保存会(横浜市泉区)・入谷歌舞伎保存会(座間市)・大谷歌舞伎保存会(海老名市)・藤野歌舞伎保存会(相模原市緑区)・目久尻歌舞伎保存会(綾瀬市)の五団体が活動をしている。

## 二 篠原歌舞伎とは

### (一) 藤野町における地芝居と現在

相模原市緑区藤野町(旧津久井郡藤野町)においても江戸時代末期より地芝居がさかんに上演され、角田一郎の調査では篠原を含め六棟の舞台が確認されている。特に、大正初期に本職の歌舞伎役者であった尾上男女蔵(明治九年(一八七六)生―昭和五年(一九三〇)没)が佐野川の鎌沢に定住し、当地の人々に演技を指導して当地の地芝居を盛り上げた。男女蔵は一座を結成して津久井郡内・八王子周辺・長野県諏訪湖地方などで興行したといわれている<sup>(6)</sup>。現在も佐野川上岩に弘化二年(一八四五)建立の石楯尾神社の神楽殿、同鎌沢に元治元年(一八六四)建立の八幡神社の神楽殿といった地芝居を行う舞台が現存しているが、佐野川では昭和二二年(一九四六)の奉納芝居を最後に実施の記録はない。使用されていた衣裳類一〇〇点と台本一一〇冊は地元個人宅で保存されているという<sup>(7)</sup>。



図1 藤野歌舞伎・大石神社公演  
平成23年(2011)10月2日撮影

このように戦後、藤野町域の地芝居は中断した地域が多かったが、平成四年(一九九二)に「藤野ふるさと芸術村構想」の事業の一つとして藤野歌舞伎保存会が再興された。各地区の経験者の手によつて、平成三〇年(二〇一八)までに二七回の公演が行われている。上演場所は藤野芸術の家、各地区の小中学校の体育館の他、大石神社(篠原)

(原)(図1)、石楯尾神社(佐野川)、葛原神社(名倉)などである。

### (2) 篠原歌舞伎の発展と衰退

篠原歌舞伎は、牧野篠原で明治期から昭和一〇年代まで毎年秋に行われており篠川(篠原・川上)劇団とも呼ばれていた。創始者は、東京で歌舞伎修行をして篠原の人々に教えた市川岩寿(本名小池岩太郎・生年不明―大正一三年〔一九二四〕没)と、地元の農民であった市川佐団寿(本名武内佐助・明治三年〔一八七〇〕生―昭和一三年〔一九三八〕没)の二人であり、市川岩寿は、五世市川寿美蔵の弟子といわれている。また、市川佐団寿は佐野川の尾上男女蔵の指導も受け、義太夫語りや振付も担当し、男女蔵の地方興行に参加することもあった<sup>9)</sup>。

牧野では篠原以外の地区でも地芝居が上演されていたが、篠原は特に熱心だったといわれる。上演は奉納神事として地区内にある大石神社で

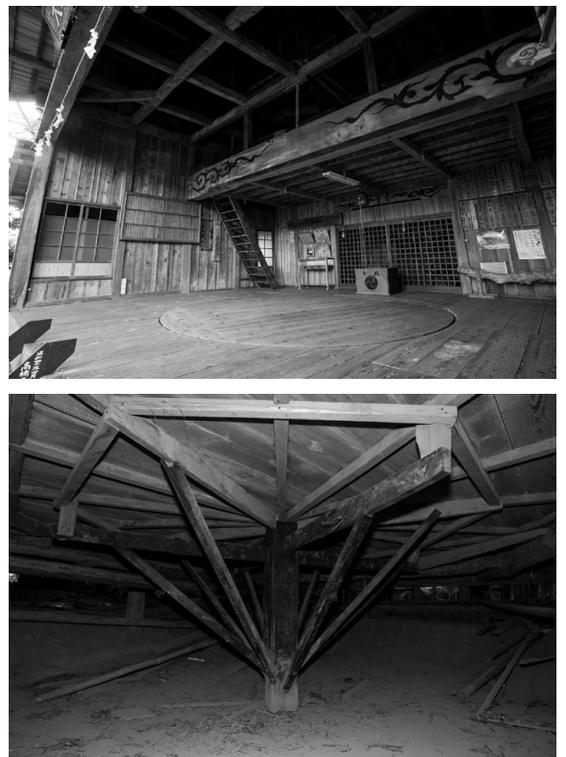


図2 (上) 大石神社拝殿廻り舞台  
(下) 廻り舞台床下部分  
平成29年(2017)11月撮影

行われた。ここは明治二九年(一八九六)の神社再建の際に、回り舞台・太夫席(ヘスツボン)と呼ばれるせり上げが設置され、拝殿でありながら舞台としての機能が付与されている。本殿と舞台が接続して同じ向きに建つ形式は全国的にも珍しい建築的特徴である(図2)。また中二階は、上演の際には化粧場兼衣裳着付場として使用し、上演のない時には衣裳や道具類を保管できるようにになっている。

しかしながら昭和一〇年(一九三五)ごろには、篠原においても人々の娯楽に変化が見え始め、他地域と同様に衰退に向かった。昭和四〇年(一九六五)一〇月の大石神社、そして第二回神奈川県民俗芸能大会における「絵本太功記・十段目」を最終公演として篠原歌舞伎は幕を閉じた<sup>10)</sup>。その際に保存会関係者により衣裳等の行方が心配され、最終公演翌日に当館に寄贈されることとなった。

### (3) 演目と台本

一般的に地芝居の演目は、「菅原伝授手習鑑」「奥州安達原」「絵本太

表1 早稲田大学文学部・郡司正勝研究室に寄贈された台本目録  
(『神奈川県民俗芸能誌(統編)』より作成)

外題	場面
伊賀越道中双六	幸兵衛住家之場
伊賀越道中双六	岡崎之場
三日太平記	嘉平次住家之場
三日太平記	本能寺之場
仮名手本忠臣蔵	勘平切腹之場
仮名手本忠臣蔵	由良之助浪宅之場
源平布引滝	実盛物語之場
源平布引滝	義賢討死之場
近江源氏先陣館	盛綱陣屋之場
近江源氏先陣館	小四郎切腹之段
平仮名盛衰記	さかろ之場
平仮名盛衰記	景季物語之場
奥州安達原	文治住家之場
出世太平記	本能寺之場
日蓮上人御法海	勘作剛門之場
日蓮上人御法海	勘作住家之場
生写朝顔日記	摩耶ヶ嶽之場
箱根靈験覽仇討	滝之湯
源平咲分揃	扇屋之場
夜討曾我狩場曙	討入之場
義経千本桜	木之実之場
桜双紙紅葉之短冊	渡場之段
桜双紙紅葉之短冊	子別乃場
伽羅先代萩	竹の間御殿之場
弓張月源家鏑矢	八丈島之場
義経腰越状	泉三郎館之場
本朝廿四孝四段目切	
赤沢山伊東伝記	
弓勢智勇港	岩蔵場
播州皿屋敷	青山館之場
曾我頼朝仮家問答	敷皮之場
撰州合邦辻	合邦住家之場

都など近隣の大都市で購入するものが多かったとされる。そのため、群馬県富士見村横室では、嘉永二年(一八四九)に江戸で購入した歌舞伎衣裳が、その紋から七世あるいは八世市川团十郎の着用していた羽織と判明したケースもある。<sup>(15)</sup> 篠原で使用していた衣裳は、拝殿再建後から二年後の明治三二年(一八九八)に購入したといわれている。

功記」など人形浄瑠璃の作品を歌舞伎化した時代物の義太夫狂言が多く、時には純歌舞伎狂言も演じられることもあったといわれる。<sup>(12)</sup> 篠原でも、上記の三演目はしばしば上演されたほか、「仮名手本忠臣蔵」「鎌倉三大記」「勧進帳」「近江源氏先陣館」「番町皿屋敷」「伊賀道中双六」などが上演された。<sup>(13)</sup>

創始者の一人である市川佐团寿の家で保存されていた台本三〇冊は、明治一〇年(一八七七)から大正一〇年(一九二一)のもので、明治三〇年代のものが多く、ほとんどが義太夫狂言で、年代・俳優名・給金などが記載された半紙版の筆写本である。<sup>(14)</sup> これらは昭和四〇年(一九六五)に、早稲田大学文学部演劇専修郡司正勝研究室に寄贈されたと記録されている。今後は衣裳と合わせての調査が必要であろう(表1)。

### 三 篠原歌舞伎の衣裳

#### (1) 購入の経緯

一般的に地芝居の衣裳は、専門の貸衣裳屋から借りるほか、江戸や京

る。その経緯は、隣村である旧相模湖町内郷村の山林三〇ヘクター<sup>(16)</sup>が売りに出された際に、山林を購入する話があったが、そのかわりに東京歌舞伎の千両役者が着用した衣裳類二三〇点を買ったというものである。創始者の一人である市川佐团寿が浅草の小芝居で不用になったものを三〇円〜五〇円で買い入れて、それを近隣の地芝居にも一日三〜五円で貸貸しをしていたともいわれる。<sup>(17)</sup>

衣裳購入について、近隣の佐野川でも(衣裳は)大正初期に購入したもので、当時木材や土地を売った金で購入したのであるが、とても新品を購入できる程の金は無く、東京の浅草辺で東京歌舞伎の下に出した中古品を何年もかかって求めたものである。<sup>(18)</sup>

といわれ、篠原と共通点が多い。市川佐团寿は、佐野川の地芝居にも参加しており、また尾上女男蔵と共に地方興行にも出ていたとされ、衣裳調達に関する情報が近隣で共有されていたとも考えられる。

(2) 衣裳目録

篠原歌舞伎の衣裳内訳について、『神奈川県民俗芸能誌(続編)』には、次のように記載がある。

千早一着 伊達カミシモ五着 麻カミシモ五着 長カミシモ二組  
 伊達羽織二枚 道中羽織二枚 伊達男物八枚 ドテラ三枚 女衣裳  
 十三枚 打掛七枚 肌ぬき三枚 白無垢二枚 東帯二組 壺織二枚  
 裁附袴五枚 緋オドシ一領 四天一枚 花四天二枚 十二単衣一  
 着 帯男女七本 遊女衣裳一着 引幕一 水引一 裏幕<sup>(19)</sup>  
 全部で衣裳が六九点、幕と水引が三点であるが、このうち当館では引  
 幕・水引・裏幕は寄贈を受けていない。

また、『ふじ乃町の藝能』の「神奈川県立博物館に寄贈引渡し目録」には以下のように記されている。

伊達羽織一着 小立一着 つば織<sup>(20)</sup>一着 長袴四着 羽織四着 大紋  
 (青黄) 二着 男着付十着 袴三着 遊女着付二着 振袖三着 野  
 袴四着 女着付五着 どてら三着 東帯一着 軍兵着一着 麻長袴  
 一着 肌ぬき四着 道中袴二着 公家衣裳一着 白もく三着 伊達  
 着付一着 老女着付二着 女肌ぬき一着 ひきぬき一着 伊達袴  
 二着 内掛<sup>(21)</sup>四着 十二衣一着 千早 一揃 寿三番叟着付(枚数の  
 記述なし) すあみ二揃 緋袴一着 遊女前掛一着 陣羽織一着  
 袴一着 鎧下着二着 よてん一着 まただれ一着 振袖二着 内か  
 け三着 帯十本 刀十本 鎧(赤黒)二着 以上<sup>(20)</sup>

総点数として一〇六点が記載されており、当館の所蔵と概ね一致する  
 (表2・3を参照)。かつらや簪<sup>かんざし</sup>などは昭和四〇年(一九六五)年の最  
 終公演の写真の一部見ることができると、目録には掲載されていな  
 い。明治三二年(一八九八)に二二〇〇点を購入したことから考えると、

約半分の衣裳が失われていることが考えられる。

(3) 衣裳の全体像

衣裳の種類としては、袴や着付が最も多い。着付とは歌舞伎の衣裳で  
 上着のことである。歌舞伎特有の衣裳としては、衣裳を一瞬で変える演  
 出の一つである引抜のための羽織・着付(図3)、動きの激しい武勇を  
 表す役が着用する四天<sup>よてん</sup>(図4)、一枚仕立ての十二単(図5)素肌に着  
 る網襦袢の素網<sup>すあみ</sup>(図6)相撲の化粧まわしに似た伊達下がり(勝垂)(図  
 7)、などがある。全体的に破れや補修跡、土埃・汗や化粧による汚れ  
 も多く、中古として購入してからすでに一世以上が経っておりいずれ  
 も状態は良いとはいえない。手作りであるろう小太刀や鎧なども揃う。衣  
 裳の素材は、木綿・麻・絹・ビロード・モス・羅紗・縹子などが使用さ  
 れている。

また八割以上の衣裳には漢数字の番号や役名が記された白布片が衿の



図3 羽織 浅葱地 (No. 89-1)  
 着付 赤地亀甲花菱文様 (No. 89-2)



図5 十二単 印度更紗木綿地 おめり付  
「義経千本桜」(No. 83)

裏側に縫い付けられている。番号は「一号—六十二号」までと「新—新三十二号」がある。近隣に賃貸しをしていたとも伝えられていることから、衣裳を管理するために付けられたものと考えられる。



図4 四天 青絹地金馬簾付 「忠臣蔵」(No. 34)



図6 素網 茶綸子地 (No. 23)

(4) 衣裳デザイン

衣裳のデザインは、他地域の地芝居衣裳と同じく、龍(図8)・鳳凰・獅子(図9)などの力強さを表す柄や、立身出世を表す鯉の滝登り、鶴亀や扇などの吉祥文様、華やかな金銀糸の刺繍、染めの文様、蝶や松竹梅の切付(アップリケ)などがあるものが多い。大柄で客席からはつきり見え、衣裳の背中側には観る者を惹きつける柄があるのが特徴である。色合いは、赤・黒・紫・浅葱色などの色が多い。また、袴や着付には紋が付けられているものもある。どの衣裳も非常に手の込んだ作りとなっており、補修を重ねて何十年も大切に使用してきたことが感じ取れる。篠原の購入から百年以上を経た現在でも華やかさは健在であり、痛みはあっても色あせは少ない。



図7 伊達下がり(脛垂) 赤地金繡飛龍文様  
「菅原伝授手習鑑」(No. 35)



図8-2 打掛 紫地雲龍立浪文様 (No. 74)



図8-1 着付 青地飛龍花筏文様 (No. 69)



図9 打掛 黒羅紗地唐獅子牡丹文様 (No. 76)

おわりに

本稿では、篠原歌舞伎保存会より寄贈された資料についての紹介を行った。当該地域の伝統芸能を長く支え、本県における地芝居の様相を伝える貴重な資料群といえる。当館には同じく旧津久井郡津久井町根小屋において使用された地芝居衣裳も所蔵しており、合わせて資料調査を行うことで神奈川における地芝居研究の今後につなげていきたい。

図版について

図1は北河直子氏撮影、図2・4・6―9は岸山浩之氏撮影、図3・5は筆者撮影。

付記

本稿をまとめるにあたり、桑山童奈氏、新井裕美氏にご教示いただきました。また資料整理は中村茉貴氏と実施しました。

註

- (1) 角田一郎『農村舞台探訪』一九九四 一六七頁―二二六頁 和泉書院※本稿における舞台数の情報については、角田の調査を基本に記述する。
- (2) 永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌(統編)』一九六七 八六七頁 神奈川県教育委員会。
- (3) 守屋毅『村芝居―近世文化の裾野から―』一九八八 三八―四十頁 平凡社。
- (4) 玉木裕希「神奈川県旧藤野町の農村舞台に関する研究」『トウキョウ建築コレクション2012』二〇一―一三三頁 建築資料研究所。
- (5) 前掲註(2) 八六二―八六三頁。
- (6) 藤野町教育委員会『ふじ乃町の藝能』一九八七 二―三頁。
- (7) 前掲註(6) 九一―一〇頁。
- (8) 前掲註(2) 八六四頁。
- (9) 前掲註(6) 一二頁。
- (10) 前掲註(6) 一二頁。
- (11) 前掲註(2) 八六七頁。
- (12) 前掲註(3) 六六―六七頁。
- (13) 前掲註(6) 一二頁。
- (14) 前掲註(2) 八六七頁。
- (15) 前掲註(3) 七三頁。
- (16) 十町歩(約九ヘクタール)とも伝えられている。
- (17) 前掲註(2) 八六六頁。
- (18) 前掲註(6) 九頁。
- (19) 前掲註(2) 八六六―八六七頁。
- (20) 前掲註(6) 一五頁。

表2 小太刀一覧

No.	資料名称		点数	法量 (全長、又は径〔Φ〕cm)
1	小太刀	柄のみ	1	15.5
2	小太刀	鞘のみ	1	40.0
3	小太刀		2	45.0
4	小太刀	鞘のみ	1	51.0
5	小太刀		2	53.0
6	小太刀	鞘のみ	1	58.0
7	小太刀	刀身のみ	1	58.0
8	小太刀		1	67.0
9	小太刀	鞘のみ	1	67.0
10	小太刀	鞘のみ	1	69.0
11	小太刀	鞘のみ	1	70.0
12	小太刀	鞘のみ	1	71.0
13	小太刀	鞘のみ	1	72.5
14	小太刀		1	76.0
15	小太刀		1	95.0
16	小太刀	鞘と刀身	2	鞘: 35.0 刀身: 33.0
17	鏢		1	Φ7.5
18	鏢		1	Φ7.5

表3 篠原歌舞伎衣裳一覧

No	資料名称	演目又は役名	白布片の記載番号	法量(丈×巾) cm	備考
1	伊達羽織	黒羅紗地飛龍波濤文様	男 「新九号」	120.0×133.0	
2	羽織	茶地	老翁 「三十号」	113×128.8	紋(3つ剥落)
3	羽織	白地亀甲鶴文様	男 「新十八号」	130.0×111.5	「明蔵」の附票付き
4	羽織	鶯茶地	男 「新式拾壹号」	108.5×130.5	
5-1	羽織	緑地諫鼓鶏と松梅文様	男 「道中二十八号」	133.0×116.0	
5-2	着付	緑地鶏雌雄と松梅文様	男 「二十七号」	154.0×134.0	
6	肌抜	白絹地金繡松文様	男 「五十号」	73.5×131.8	引抜か
7	肌抜	白地牡丹文様	男 「五十一号」	88.5×130.0	引抜か
8	陣羽織	茶地	男 「四十七号」	79.0×51.0	
9-1	軍兵着	茶地獅子文様	男 「四十七号乙」	99.5×59.0	
9-2	軍兵着	茶地獅子文様	男 (不明)	97.0×77.0	
10	着付	茶地	男 「新五号」	134.0×147.0	袖丈の調節が可能 紋(3つ剥落)
11	着付	茶地	男 「三十九号」	134.0×151.0	
12	着付	濃茶地	「假名手本忠臣蔵」寺岡平右衛門 「四十二号」	127.5×153.0	平の紋(3つ)
13	着付	緞子地花文様	「近江源氏先陣館盛綱陣屋」和田兵衛秀盛 「新二十二号」	185.5×126.0	
14	着付	紺縹子地	男 「二十五号」	136.0×151.5	同じ色の袴の下に着る当布(3つ)
15	着付	茶木綿地	男 「五十六号」	196.0×126.0	違鷹羽紋(3つ)
16	着付	茶地	老翁・嘉平次など 「二十九号」	127.0×143.0	紋(5つ)
17	着付	紺地	男 「四十六号」	136.0×126.0	当布(3つのうち1つ剥落)
18	着付	茶地獅子文様	男 「二十六号」	139.0×125.5	
19	どてら	黒地格子縹文様	男 「十八号」	153.0×134.0	「大正5~6年 二十ひこの□茂をするのに作った」の附票付き
20	どてら	黒地格子縹文様	男 (不明)	129.0×141.0	
21	どてら	紺地格子縹文様	男 「十九号」	153.5×134.0	
22	にびき	白地	男 「新参拾号」	106.0×131.0	
23	素網	茶縹子地	男 (不明)	55.0×174.0	
24	素網	藍木綿地	男 (不明)	55.0×164.0	
25-1	鎧	緑地 胴	「絵本太功記十段目」 (不明)	81.0×47.0	昭和40年(1965)最終公演で使用 丸十紋(2つ)
25-2	鎧	緑地金繡 垂	「絵本太功記十段目」 (不明)	59.0×58.0	昭和40年(1965)最終公演で使用
25-3	鎧	緑地 脛当	「絵本太功記十段目」 (不明)	24.0×32.0	昭和40年(1965)最終公演で使用
26-1	鎧	金地鳳凰文様 胴	「絵本太功記十段目」 (不明)	69.0×47.0	昭和40年(1965)最終公演で使用
26-2	鎧	赤地金繡 垂	「絵本太功記十段目」 (不明)	60.0×64.0	昭和40年(1965)最終公演で使用 日の丸紋(2つ)
26-3	鎧	赤地金繡 脛当	「絵本太功記十段目」 (不明)	24.0×32.0	昭和40年(1965)最終公演で使用
27-1	着込鎧 着付	茶縹子地吉祥文様	男 「新式拾八号 甲」	94.0×120.0	
27-2	着込鎧 袴	茶縹子地吉祥文様	男 「新式拾八号 乙」	97.0×56.0	
28-1	着込鎧 着付	赤地菊花文様	男 「新二十七号 甲」	84.0×138.0	
28-2	着込鎧 袴	赤地菊花文様	男 「新二十七号 乙」	72.0×56.0	
29	壺織	茶地倭錦	男 「四十四号」	139.5×122.0	
30	束帯	緞子地鶴と吉祥文様	男 「四十八号」	135.0×147.5	
31	狩衣	黒縹子地	男 「三十六号」	152.0×152.0	
32	素襖	白木綿地鶴若松文様	「三番叟」 「一号」	79.5×183.5	
33	剣先烏帽子	白地	「三番叟」 (不明)	48.0×33.5	
34	四天	青絹地火炎文様 金馬簾付	「忠臣蔵」 「四十一号」	154.0×128.0	
35	伊達下(脛垂)	赤地金繡飛龍文様 馬簾付	「菅原伝授手習鑑」 「新三十二号」 「二十五号」	63.5×41.0	
36-1	大紋 肩衣	黄麻地	「勸進帳」富樫泰家、「忠臣蔵」松の廊下の浅野長矩 (不明)	81.5×162.0	車輪紋(3つ)
36-2	大紋 袴	黄麻地	「勸進帳」富樫泰家、「忠臣蔵」松の廊下の浅野長矩 (不明)	140.0×104.0	
37-1	大紋 肩衣	紺地	男 「八号」	81.0×160.0	五七桐紋(3つ)
37-2	大紋 袴	紺地	男 「八号」	122.0×84.5	
38-1	長袴 肩衣	紫地雲龍文様	男 (不明)	73.0×90.0	鶴菱紋(3つ)
38-2	長袴 袴	紫地雲龍文様	男 (不明)	90.0×100.0	
39-1	長袴 肩衣	浅葱麻地	男 「三号」	79.0×77.0	五七桐紋(3つ)
39-2	長袴 袴	浅葱麻地	男 「三号」	153.0×68.0	
40-1	袴 肩衣	紫地	男 「五号」	86.0×82.0	
40-2	袴 袴	紫地	男 「五号」	103.0×110.0	
41-1	袴 肩衣	紺縹子地	男 「六号」	90.0×74.5	
41-2	袴 袴	紺縹子地	男 「六号」	93.5×95.0	
42-1	袴 肩衣	白地毘沙門亀甲文様	男 「七号」	85.0×81.5	
42-2	袴 袴	白地毘沙門亀甲文様	男 「七号」	88.0×105.5	
43-1	袴 肩衣	橙地松竹梅散し文様	男 (不明)	80.0×68.0	
43-2	袴 袴	橙地松竹梅散し文様	男 (不明)	111.0×80.0	
44-1	袴 肩衣	浅葱縹子地金繡瓢箪文様	男 (不明)	37.0×84.0	
44-2	袴 袴	浅葱縹子地金繡瓢箪文様	男 (不明)	86.0×162.0	
45-1	袴 肩衣	赤地菊花文	男 (不明)	80.0×89.0	
45-2	袴 袴	赤地菊花文	男 (不明)	91.0×90.5	
46-1	袴 肩衣	紺麻地	男 「六十号」	86.5×72.2	梅車紋(3つ)
46-2	袴 袴	紺麻地	男 「六十号」	90.0×97.0	梅車紋(1つ)
47-1	袴 肩衣	紺麻地	男 「四号」	72.0×74.0	金剛杵の紋(3つ)

No	資料名称	演目又は役名	白布片の記載番号	法量 (丈×巾) cm	備考	
47-2	袴 袴	紺麻地	男	「四号」	85.0×112.0	金剛杵の紋 (1つ)
48-1	袴 肩衣	浅葱麻地	男	「五十八号」	74.0×75.0	梅車紋 (3つ)
48-2	袴 袴	浅葱麻地	男	「五十八号」	91.5×65.0	梅車紋 (1つ)
49-1	袴 肩衣	浅葱麻地	男	「六十一号」	78.5×60.0	離立葵紋 (3つ)
49-2	袴 袴	浅葱麻地	男	「六十一号」	93.0×74.0	離立葵紋 (1つ)
50-1	袴 肩衣	浅葱麻地	男	「五十九号」	86.0×73.2	遠鷹羽紋 (3つ)
50-2	袴 袴	浅葱麻地	男	「五十九号」	86.0×83.0	遠鷹羽紋 (1つ)
51-1	伊達袴 肩衣	黄地菊花文様	男	(不明)	93.0×87.0	抱杏葉紋 (3つ)
51-2	伊達袴 袴	黄地菊花文様	男	(不明)	95.0×113.0	抱杏葉紋 (1つ)
52-1	伊達袴 肩衣	緑地七宝繫文様、茶地雲取亀甲文様	男	「甲乙式十四号」	87.5×86.5	
52-2	伊達袴 袴	緑地七宝繫文様、茶地雲取亀甲文様	男	「甲乙式十四号」	95.0×109.0	
53	野袴	茶地	「伊賀越道中双六」政右衛門	「十四号」	109.5×71.0	上は肌抜
54	道中袴	緑地立涌牡丹文様	男	「新十八号」	91.0×82.5	
55	道中袴	緑地金縷扇文、裏地：高砂文様	男	「十六号」	100.0×79.0	
56	袴	緑地角繫文様	「番町皿屋敷」青山鉄山	「第九号」	80.0×83.0	
57	袴	緑地格子輪繫文様	男	「十七号」	95.0×92.5	
58	着付	赤モス地	女	「新七号」	129.0×140.0	紋 (3つ)
59	着付	緑地格子縹扇文様	「奥州安達原三段目」袖萩祭文の段	「三十二号」	154.0×132.0	
60	着付	浅葱地金縷飛龍菊花文様	女	「三十七号」	174.5×128.0	菱紋 (5つ)
61	着付	浅葱地	「絵本太閤記」操	「六十二号」	148.0×60.5	
62	着付	紫地桜文様	女	(不明)	143.0×110.0	
63	着付	赤地	女	「四十五号」	152.5×126.0	
64	着付	青地	「忠臣蔵」お軽、「本朝廿四孝」お種・世話女形	「二十四号」	152.0×130.5	
65	着付	茶地扇と花蝶散文様	女	「三十一号」	143.0×108.0	紋 (5つ)
66	着付	紫地	女	「新拾七号」	147.5×125.0	丸に三木紋
67	着付	白地鶏雌雄紅白梅文様	老嫗	「二十三号」	160.0×122.0	
68	着付	茶地雪柴垣に梅文様	老嫗	「四十九号」	156.0×132.0	
69	着付	青地飛龍花筏文様	女	「三十八号」	1750×122.0	鳳凰紋 (5つ)
70	着付	黒地格子縹文様	遊女、他二役使用	「新十一号」	178.0×132.5	袖丈の調節が可能
71	着付	白木綿地	女	「新二拾九号」	147.0×131.5	白無垢
72	着付	白紬子地卍紗綾形文様	女	「新六号」	147.0×127.5	白無垢
73	着付	白地	女	「三十三号」	146.0×132.0	白無垢
74	打掛	紫地雲龍立浪文様	娘	「二十二号」	188.0×127.0	
75	打掛	赤地麻葉金縷龍鶴菊花文様	女	(不明)	191.5×128.0	
76	打掛	黒羅紗地唐獅子牡丹文様	女	「新一号」	175.0×116.0	
77	打掛	赤地鯉滝登文様	女	(不明)	173.0×137.0	
78	打掛	紺地八つ藤に唐草文様	女	「新参号」	170.0×133.0	
79	振袖	黄地金縷流水草花文様	奥方	「四拾三号」	183.0×118.0	
80	振袖	浅葱地雪輪花扇面散文様	女	「新十号」	181.0×130.0	
81	振袖	黄地金縷吉祥文様	女	「二十号」	181.0×130.0	
82	振袖	黄紬子地金縷流水草花文様	女	「新拾貳号」	179.0×132.0	
83	十二単	印度更紗木綿地 おめり付	「義経千本桜」	「五十七号」	180.0×173.0	
84	緋袴	赤地	女	「十二号」	165.0×90.0	
85	前掛	茶ビロード地金縷欄干と九尾狐文様	遊女	(不明)	79.0×37.0	
86	肌抜	赤地金縷白梅文様	「絵本太功記十段目」初菊	「三十四号」	106.0×128.5	昭和40年 (1965) 最終公演で使用 引抜か
87	羽織	赤地金縷雲龍火炎文様	女	「新十三号」	80.0×128.0	
88	羽織	赤緞子地吉祥文様	女	「五十二号」	68.5×125.5	
89-1	羽織	浅葱地	女	「四十号」	72.5×71.0	丸に二つ引紋 (5つ) 引抜に使用
89-2	着付	赤地亀甲花菱文様	女	「四十号」	128.0×125.5	引抜に使用
90-1	羽織	紫地濡燕文様	子ども	「新二十号甲」	111.0×96.0	
90-2	着付	紫地濡燕文様	子ども	「新二十号乙」	117.0×117.0	
91	着付	黒ビロード地	「伽羅先代萩」千松	(不明)	117.5×129.0	
92-1	帯	緑地変わり格子吉祥文様		—	257.0×28.5	
92-2	帯	緑地変わり格子吉祥文様		—	141.0×28.5	
93-1	帯	赤地だんだら縹菊格子文様		—	172.0×28.5	
93-2	帯	赤地だんだら縹菊格子文様		—	251.0×28.6	
93-3	当帯	白地		—	133.0×11.0	
94-1	帯	緑地倭錦吉祥文様		—	277.0×28.0	
94-2	帯	緑地倭錦吉祥文様		—	352.0×28.0	
94-3	帯	緑地倭錦吉祥文様		—	17.5×27.0	
95-1	帯	茶緞子地		—	272.0×27.5	
95-2	帯	茶緞子地		—	152.0×29.5	
95-3	帯	茶緞子地		—	37.5×17.0	
96	帯	赤地撫子文様		—	36.4×10.5	
97	帯	茶地雲龍文様		—	358.0×30.5	
98	半幅帯	茶地		—	390.0×10.5	
99	半幅帯	紫地花文様		—	38.0×12.0	
100-1	半幅帯	浅葱地献上柄		—	208.0×10.0	
100-2	帯	浅葱地献上柄		—	21.5×17.5	
101-1	半幅帯	白地献上柄		—	219.0×11.0	
101-2	帯	白地献上柄		—	29.0×23.5	
102	帯	茶地変わり菱文様		—	364.0×10.5	
103	帯	紫地吉祥文様		—	240.0×10.5	
104-1	帯	白地卍文様印金		—	256.0×11.5	
104-2	帯	白地卍文様印金		—	27.0×23.5	

※演目又は役名の項については、当館寄贈の際に付けられた附票や最終公演の写真から判明したものを記載した。